浦賀文化

平成22（2010）年4月1日

第２２号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

編集・発行：横須賀市浦賀コミュニティセンター分館（浦賀文化センター）　〒239－0822　横須賀市浦賀　7－2－1　　TEL&FAX　046－842－4121

町の盛衰を眺めてきた 愛宕山（浦賀園）

愛宕山は関東大震災の山崩れで民家七十四戸、住民百人余りを飲み込み、山の姿を変えてしまいましたが、浦賀の人々に愛され、親しまれている愛宕山とはどのようなところなのでしょう。

明治二十四（一八九一九）年六月に開園した愛宕山の「浦賀園」は横須賀で最も古い公園で、平成二十三年には開園百二十年を迎えます。

桜、ツツジをはじめとして樹木の種類も多く、野鳥もたくさんいて、森林浴やバードウォッチングも楽しめます。また、浦賀湾、船の行き交う浦賀水道、遠くは房総半島を望む眺望も見逃せません。

愛宕山は古くは陣屋山と呼ばれていました。豊臣秀吉から関東一帯を与えられた徳川家康は、新領地全体の直轄地経営のために各地に陣屋を置きました。その一つが西浦賀町、愛宕山の山裾であり、初代代官の長谷川七左衛門長綱の陣屋が置かれていたためといわれています。陣屋とは、地元支配のため年貢を取ったりする役所の出先です。

幕府管領のころは、山に警鐘を吊るした小楼があり、非常事態発生の際は鐘を鳴らし報せていました。ペリー来航の時も大きく鳴らされたようです。

愛宕山の名は、この山に「愛宕神社」が祭られていたからといわれています。「中島三郎助の招魂碑」建立のため町の沢山の人々が公園として整備し、町民の憩いの場所となりました。

公正新聞社主催、第四回観桜会（明治四十二年頃）が盛大に行われた様子が加茂元善氏の著した「浦賀志録」に記されています。そこには、参加者は会費五十銭を払い、大滝町に集合。号砲を合図に音楽隊とともに出発。平坂、田戸、海岸沿いを大津に、矢ノ津坂を越えたあたりで揃いの赤いたすきに赤い前掛け姿の浦賀の芸妓連が出迎え、この芸妓連の先導で愛宕山へと浦賀の町を練り歩きます。会場の愛宕山では酒、サイダー、甘酒、おでん、桜団子、寿司の模擬店が所せましと並び、大好評の公正宝探し（景品は懐中時計二個等高価なものがあったようです）。ステージでは浦賀の芸妓と横須賀の芸妓の対抗余興合戦、当時大流行の薩摩琵琶の演奏などが行われた、とあります。浦賀が活気に溢れていた証でしょう。

ここ愛宕山には、「中島三郎助招魂碑」（浦賀文化第九号）、「中島君招魂碑発起者の碑」（同第十七号）、「咸臨丸出港の碑」（同十八号）「与謝野鉄幹（本名・寛）、晶子歌碑」の石碑があります。現在は東浦賀の東林寺に移された「忠魂碑」（同第十三号）も愛宕山にありました。

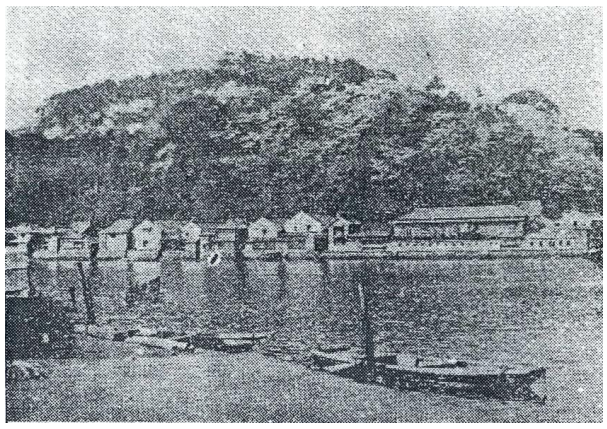
「与謝野鉄幹・晶子の歌碑」は、横須賀市による「横須賀の“地”にゆかりの深い文学者百人の碑建立事業」に基づき、中央公園に立つ岩野泡鳴「田戸の海ぬし」に続く文学碑第二弾として、昭和五十七年十一月十二日に除幕式が行われました。昭和十年二月に、観音崎、浦賀、久里浜を同人と吟行した時に詠まれた句が刻まれています。翌三月、鉄幹は肺炎で亡くなったため、鉄幹の生涯最後の歌の一つとなってしまいました。

← 中島三郎助招魂碑の左下、浦賀湾を見下ろすところに立つ歌碑
大理石、高さ 1.9m、幅 1.2m、奥行 20 ㎝
台座は根府川石

歌碑に刻まれている俳句

黒船を怖れし世などなきごとし　寛
浦賀に見るはすべて黒船
春寒し造船所こそ悲しけれ
浦賀の町に黒き鞘懸（さやけ）く　晶子

うらがの寫眞館　— 愛宕山 —



関東大震災前の東浦賀から見た愛宕山（浦賀案内記より）

大正四年に発行された『浦賀案内記』に掲載されている愛宕山の全景写真です。関東大震災前の山の姿と町の様子が良くわかります。右側のひときわ大きな建物は大黒屋の店舗と蔵で、町並みの様子から当時の浦賀の隆盛ぶりが偲ばれます。

第十二回咸臨丸フェスティバル
咸臨丸浦賀出港百五十周年

咸臨丸が浦賀を出港して百五十年となる今回の咸臨丸フェスティバルは、趣向を凝らした企画満載で4月24日（土）25日（日）、二日間開催です。

※場所：住友重機械工業㈱浦賀工場と浦賀港周辺

※イベント開催日

24日25日：百五十年前の「歴史・文化展示会」「友好国・友好市町村交流展示会」、渡船「愛宕丸」無料乗船、浦賀屯営跡の碑一般公開、浦賀ギャラリーなど

24日：式典、浦賀史跡案内、水恋乞いレース、浦賀○×クイズ、巡視船乗船体験航海、JAZZコンサート（レンガドック活用イベント）など

25日：講演会「咸臨丸の歴史」「百五十年前の浦賀」、音楽隊演奏会など

事前申込が必要なものがあります。時間、場所など詳細はポスター、チラシおよび咸臨丸フェスティバル実行委員会事務局（浦賀行政センター内）☎841-4155でご確認ください。

参考資料

浦賀志録（上）　加茂元善著
浦賀案内記
横須賀人物往来（改訂版）
私の歩みがたり　山本詔一著
町かど博物誌⑪　渡辺栄著
ふるさと横須賀　石井昭著

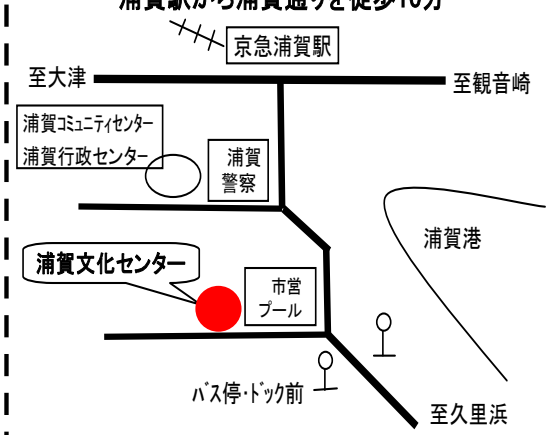
東西風

一年の始めは一月であるのに、年度の始まりは四月。この制度はいつから行われるようになったのであろうか。などなどこの時期のことで様々な疑問が生じた。

調べてみると、江戸時代までは年度という区切りはなく、何事も一月から始まっている。もっとも、浦賀奉行は文政二年（一八一九）から二人制になり、一人は江戸、一人が浦賀にいたが、この交代は三月中に行われている。また、明治のはじめの学校は九月に始まっており、アメリカスタイルになっていた。明治十一年十一月に大蔵卿の大隈重信が、明治八年七月より、九年六月に至る一周年の歳出入の決算報告をしたのが、年度の決算の始まりと言われている。これが明治二十二年に国の会計法が改められてから四月が年度の始まりとなったということのようだ。

今年度も始まりますが、地域活性の文化ステーションとしての浦賀文化センターと「浦賀文化」によろしくご支援をお願いします。（山本）

浦賀コミュニティセンター分館
（浦賀文化センター）
浦賀駅から浦賀通りを徒歩10分



所在地：横須賀市浦賀7－2－1
電話
FAX：　046－842－4121

発行：横須賀市浦賀コミュニティセンター分館(浦賀文化センター)　休館日：年末年始　電話番号：０４６－８４２－４１２１

浦賀の植物

ヤタイヤシ（ココスヤシ）

（ヤシ科 ）

京急浦賀駅下のロータリーにヤシ類の一種ヤタイヤシが三本あります。たしかこれは十数年前に植栽されたものと思います。元気良く順調に生育し、ここ数年花も咲き、食べられる果実もたくさん実っています。ほかにも光洋小学校の朝礼台そばに小さいのが一本、馬堀小学校の前の団地の庭に結構大きく育った三本、観音崎ボードウォークあたりに二本が見られます。ヤシ類は落葉性のものはなく、みんな常緑樹・木生(もくせい)の単子葉植物(子葉が一個現れる)で、熱帯から亜熱帯地域(湿潤地を中心)に分布し、二百属、約二千六百八十種あります。日本の自生種は西南日本の沿岸域や島など小笠原に六属六種しか見られません。神奈川県内には栽培されたシュロが見られ、鳥などにより種子が運ばれ方々の山々で野生化しています。三浦半島の山も例外ではありません。ヤタイヤシの原産地はアルゼンチン東北部、パラグアイ、ウルグアイ北部、ブラジルといわれています。幹は高さ六m、径は四十五cmにもなりますが、幼木はとくに優雅さがあり鉢植えの人気は抜群とのこと。葉は羽状葉で大きく約二、五mにもなり、そりかえり葉裏は青白緑色で、全体が白っぽく見えるので他のヤシ類と判別できます。小葉は規則的にならび、長くたれさがっています。このヤシはマイナス七℃までは生育が可能とされ温暖なこの地には適しているのかもしれません。ひとつひとつの黄色い小さな花が沢山集まった約九〇cmの肉穂花序を葉のわきから出し、枝の上部に雄花(おしべ六)、基部に雌花(めしべ一 柱頭三)からなっています。初夏のころ鈴なりの開花は見ごたえがあります。果実は秋から初冬にかけて熟し、暗黄～燈色または赤みのある茜色をしていて甘酸っぱい香りがします。おおよそ長さは三・五cm、径二cmの大きさになります。梅の果実ぐらいでしょうか。独特の味、香り、甘さがあります。人により、びわのにおい・パパイヤのにおい・梅酒のにおいと様々な反応・感じ方があります。浦賀駅のものを去年の十一月ころ食べた時はとても甘みがあり、おいしかったのですが時期にもよるのでしょうか。今年一月の果実は完熟しすぎたせいか少し酸味がありました。一つ食べるとあとをひきますよ(笑)。

ヤシといえば日本では代表的なココヤシを指しますが、なんといっても島崎藤村作詞、大中寅二作曲の「椰子の実」の歌でしょう。「名も知らぬ遠き島より流れ寄る椰子の実ひとつ」ラジオ・レコードから流れてくる東海林太郎や二葉あき子の美声。私の生まれる三年前、昭和十一年国民歌謡として歌われた時期は日本の中国侵攻が始まり、さらに南方に進出が計画された時であり、文化政策として政府当局は国民の意識を中国・東南アジアへの興味関心と強い憧憬・ロマンを助長するのにプラスと考えていたとしても不思議ではないと思います。

大前　悦宏
神奈川県植物誌調査会会員

実が美味の浦賀駅前のヤタイヤシ

ヤタイヤシの実と種(1月22日採取)

笑話一題

昭和三十年頃の小学校六年生の国語の教科書に「咸臨丸」という詩が載っていた。

『日本はながいゆめを見ていた　三百年もの長いゆめだった』で始まり、『咸臨丸は新しい道を開いた　その道から日本にさわやかな夜明けが来た』で終わるやや長文の詩だ。この教科書をご存知の方いらっしゃいますか？

宇野光雄「語前　語後」で見つけた話。武蔵野市で美術教師をしていた若き日の著者は、ある日代理で国語の授業の教壇に立ったとき、この詩に出合った。生徒と一緒にこの詩を読んだ著者はおおいに感激し、ぼーっとなったと書いている。

4月24、25日に浦賀で咸臨丸フェスティバルが行われる。どんな感動に会えるでしょうか。

特別展で展示された咸臨丸内部解剖図

―盛況でした歴史講座と特別展―

講座の様子

歴史講座「中島三郎助と浦賀奉行所」を昨年十一月二十五日～十二月二十三日の水曜日、全五回開講しました。多数の皆様にご応募いただきありがとうございました。

また、二月六日～二十一日まで「咸臨丸と浦賀」(万延元年遣米使節百五十周年)をテーマに特別展を開催しました。こちらも多数の皆様のご来館に関係者一同感謝いたします。

今後も皆様のご期待に応えられる企画を計画してまいります。ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

歴史語らい座・浦賀　二十二

郷土史家
山本　詔一

東叶神社再建

天明四年(一七八四)十二月、東浦賀は大火にみまわれました。この火事は鎮守・叶明神の社殿までもが全焼するほどの大きな災害でした。

天明と年号を変えてから日本の国は天変地異が続き、二年に東北地方で始まった冷害による凶作、三年には浅間山の噴火と降灰による作物ができない地域があり、浦賀では降灰がなかったものの作物が出来ず、年貢の減免を願い出ているほどです。

東叶明神の社殿再建を検討し始めた天明五年は、浦賀でも日照りが続き、雨乞いをしていましたが、またしても作物の出来が悪く、また年貢の減免を願い出ています。

当時の浦賀は定免(じょうめん)といって、作物の出来具合がよくても、悪くても一定期間同じ率で年貢を支払う方法をとっていました。しかし、この年は検見取りにして欲しいので、作柄を見に来てほしいといっています。検見取りとは、毎年その土地へ役人を派遣し、作柄を見て年貢の率を決める方法をいい、安定した収穫が得られている時は定免がよく、不作の時は検見がよろこばれました。

東浦賀村のように、きわめて農業依存率が低い村でも、江戸時代を通して、もっとも基本的な納税対象であった農作物(米作)に関わることになると神経をとがらせていたことがよくわかります。

こうした状況のなかでの再建であったので、村の中で相談の結果、軽造営とすることにしました。この「軽造営」というのが、どの程度の建物を建てることなのかよくわかりません。

また、社殿を焼失前に建っていたところより、「一丈四・五尺高い場所に」社殿を建てたいと奉行所に許可願いを出しています。

その理由として、平地にあっては火災などからの災害から社殿を守ることができないので、約四m四、五十cm高く、また明神山の社地を三間ばかり削って、石垣を築き、広くした場所に再建できるようにお願いをしています。

しかし、世の中の状況が悪かったのでしょうか、思うように再建資金が集まりません。

そこで、再建の賛助金を浦賀湊に入津する船から徴収する手段にでました。船からお金などを取るときには浦賀奉行所の許可が必要でした。東浦賀村では天明六年一月から八年十二月までの三年間の許可願いを奉行所に出しました。この結果の記録がありませんが、奉行所も東浦賀からの願いでは聞かぬ訳にはいかなかったことと思います。

浦賀へ入津する船に対して、寺社が当時の言葉では「勧化」「勧進」、現代的に言えば「カンパ」活動をすることは数多くみられ、遠くは江ノ島の三つの寺社が幕府を動かして、やった例などがみられます。

船からお金等を徴収するのは、船改めをする廻船問屋であり、問屋も自分たちの町の問題であれば積極的に動きますが、よその地域のことであると渋い顔をしたことでしょう。

西浦賀から見た東叶神社

東叶明神の再建は、以後記録がなく、どのような展開になったかは不明ですが、無事に目的額が集まったことは想像できます。